傳源後賴　元亨本古今集

乾

301
10
帙入

始

傳源俊賴書

元永本古今集

釋文

乾

70/-10

傳源俊頼筆 元永本古今和歌集(乾) 外題並釋文

外題

この歌書は三井高清男の珍藏に係る古今集の假名序と共に完全せるものは、古き事この書の右に出づるものはない。尾上博士の古本古今集の原本であり、最も貴重なものである。

上卷は百九十枚下卷は百九十六枚あり、上卷の奥書(二十頁)に元永三年七月廿四日と同筆のものがあるので、元永本古今集と稱せらるゝのである。壯麗なる料紙は本願寺本卅六人集に亞ぎ高雅雄健なる書風は、古筆界で屈指のものとして推重せられてゐる。

書は三十六人集貫之上と同筆で、即ち佐理卿の筋切(通切)行成卿の室町切(卅六人集人麿集の斷片)俊頼朝臣の古今集卷物切、及下絵拾遺集と同手である。書冊中いづれの部分も夫々に妙趣をそなへ、氣韻たかく

水莖のあときよく、一紙一葉悉く單獨に色紙としてみても愛玩すべきものである。殊に散らし書きのかきぶりは、超絶非凡で、意を練り思ひを凝らし、鋭鋒に又禿筆をもいとはず、變化の妙を盡して高雅に優美に流麗に閑寂で、その眞名と假名との調和は渾然として珠のごとく、讃すべき詞に苦しむほどである。その上に書寫の年號さへ明かに記されて、上述の諸筆跡の年代を明かにするを得るのは悅ぶべきである。鑑識界に重視せらるゝのも偶然ではない。

料紙は全卷すべて、から紙を用ひ、上卷には大小切箔、のげ箔の莊嚴華麗なる、所々に紫黃などのくまどりありて、一しほの美しさを添へてゐる。下卷は小さい切箔のみ撒いてある。紙の色は紫黃茶草色の各々の濃きと淡きと白とで、繧繝式に一重ね五枚づゝで、胡蝶裝にとぢられてゐる。から紙の文樣も卅六人集のと全く同一であるから、其時代の同じきを知り得るのである。

今こゝに優位を占むる部分のみを所揭することにしたが、そのいかに圓轉自在なる巨人の筆を偲ぶに餘りあるか、深く玩味研究すべき墨寶中の珠玉である。

釋文

古今和歌集卷第一

や万とうたはひと能こゝろを
當ねとしてよろづのことの者と
ぞなれり个るよのな可にあ
るひとことわざしけ支毛の那
れ者こゝろ爾おもふことをみる
なにめてゝをれるは可り所を
美なへしわれおち爾支と人に
か多る那
在原業平そのこゝろ阿ま利て

事あ可須しほめる花能色
なくて二本ゐのこれるかことし
月やあらぬ者るやむ可し□者る
の花の可个爾や數め留可ことし
おもひ意天ゝこ悲し支と支は
者つ可利のな支王多るとも人
能しらな無
可々ゝみ山いさたちよ利てみて
ゆ可むとしへぬるみ者於いや
しぬる登
のたえ須万つのはのち利らせ寸

してま佐支能可徒らな可く
徒た者利と利のあと悲さしう
登ゝまり那盤歌能さ万をし
理ことの心をえ多らん非とは
於はそらの徒支を美る可こ
東くに意爾しへ越あふ支氐

いまをこひさらめかも

古今和歌集卷第一

春哥上

不るとし爾春の立ける日

在原元方

としのうちに者るはき爾个利
飛とゝせをこそとやい者むこと
しとやい者無

者るたちける日よめる

紀貫之

曾氐飛ちて无數悲し美つのこ
ほ禮るをはるたつ个ふの可せや
とくらん

素性

美わ多世八柳櫻を古支未勢て
見やこそは留の耳し支な
李个流

さくらの花能毛とにてとしの
お意ぬることを那け支て

友則

い呂もか毛おなし無可しにさくらめとゝ志ふる人所あらた人ま利个る

しける　　み川年

わ可やとの花み可てらにくるひとはち利
な無能ち所こ非し可るへ支

亭子院の哥合爾

い世

みるひともな支於く山のさくらはな
ほ可の千里な無能ち所さ可未し

な支やまさとのとも

古今和歌集卷第二

春下

題不知　　讀人不知

者る可數見た那悲くや万のさくら花
うつろはんとやいろ可はり行

素性

まてといふにちらてしとま流毛の那
者那ちら數可勢能やと利は多れ可
志る王れ爾をしへよゆ支てうら三

素性法師

舞

雲林院の櫻花をよみ个る

承均法師

いさゝ久らわれも千里南ひとさ可利
あ利那者人爾う起め美えな無

理个るをむな爾

躬恒

とゝ無へ支ものとはなし爾者可那
くもちる花ことに多くふ心歟
やよひのつこも利の日雨のふ利ける
爾藤花を利て人爾つ可八春

業平

とて

ぬれつゝそしゐてを利つるとしの内爾
者るは今日をしか支利と思八

亭子院の哥合に者るのはて

みつ年

けふのみと者流を於もはぬ時谷
も堂つことや數支花の可け可は

古今和哥集第三

夏哥

題不知　讀人不知

わ可やとのい个能不ち那美散きに个
里山ほとと支數いつ可支な可無

この哥或人能いはく柿下人丸可な利

四月爾さ个るさくらを

なつと秋とゆ支可不所らの可よゐ

ちに可堂へ須ゝしき風やふくらん

古今和歌集卷第四

秋上

秋立日よめる

敏行朝臣

惡支ゝぬと免に盤さや可に美江ねと毛

風のおとにそ於とろ可れぬ類

あ支のたつ日有へ能を能こともの

可も可は者に遥遙にま可利个るに

あ支可せの不支爾し日よ利非さ可た

農あま能可はな三たゝぬ八なし

ひさ可堂能あま能可はらの和多しも利

きみわた利なはかち可久してよ

あま能可は毛みちを者し爾和多世はや

堂な者多つめの秋をしもま川

戀々天あ不夜者今夜あまの可はき

利多ちわ多利阿个須毛あら那無

寛平の御時爾七日のゆ不へに候男共

毎年爾遇とは春れ織女能ぬるよ農

か數そ須くな雁个類

織女爾借鶴糸の打延て歳の緒な
加く戀や渡らむ

題しら須　素性

今夜こ無人には遇し織女の非さし支
程爾あ盈毛去年春れ

七日の夜能あ可つ支爾讀る

御もの可堂利能ついてによみて
たてまつ利ける　僧正遍昭

佐とはあ連て人は不りにしやとなれや
に盤もま可きも秋農ゝらなる

古今和歌集卷第五

秋下

惟貞親王の家能哥合能哥

や春ひて

不く可らにのへ能久さきのし保るれ者
むへ山可せをあらしと云らん
くさ毛き毛いろ可はれともわ多つみの

道知者たつ年も行無もみち八
越ぬさと堂無个てあ支はいに
遣理

古今和歌集卷第六

冬

題不知　　讀人しら須

龍田山錦織懸十月時雨の雨を多
てぬ支爾事低
冬乃哥とてよめ類

行としの惜久裳あ流可な
ま數可ゝ見ゝ類加け散へ爾九
禮ぬとおもへ者

古今和歌集卷第七

祈

讀人しら數

わ可君は千よにまし万せ沙
ゝ禮し乃以者本とな利て
古氣と能無數左右(まて)

和當川美の者未乃万佐こ越
か所へ徒ゝ君可へむよ能有
閑數耳せ牟
し保の山さして乃意そ爾
須無千鳥きみ可三よ乎
半八千代と所な具

内侍の加美の七十賀子の右

大將藤原朝臣の四十の賀
し侍る時四季能惠可き
たるうしろの屏風の哥

素性法師

春

か數閑乃ゝ若菜つみ徒ゝよ□つよ
をい者布心は可みそしる
覽

躬恒

やま多可美久もゐ爾見ゆる佐
久ら者那こゝろの行天をら
ぬ日そな支

夏

め川らしきこ衞なら那く爾本
登ゝ支數こゝらのとし越あ可
壽もある可那

秋

あ支九れと
以呂裳可波らぬ
常葉山は可の
毛美ち越
風そ可し
希る

冬

しらゆ支の
布り志くと支八
みよしのゝやました可せに
花そ千り个る

東宮のうまれ多万ひ
个る爾まい利てよめる
内侍因香

みね多可支か數可のやまに
いづる日者くもる時なく
てら數へらな利

古今和歌集第八

離別

在原行平朝臣

たち王家れ意なはの山乃見
年爾於布る未都としき可者

人のあつま二万可れり个る
を於く利侍利と氏
ふ可や不
くもゐ爾袞
ふ可支心能おくれ
年者人爾るを人耳

美遊許な里

人爾わ可れ侍る時　つらゆ支

和可禮て布
事は意呂爾
毛あらなくに
心に染氐
わひし可る覽

甘南備の社爾天
今者可へり年と
さね可云希れ者

兼茂

志た盤禮氐
君爾心能み爾し阿れ者
可へるさまに者道毛しられ數

中納言兼輔

君可行こし乃
白山し良年
鞆雪の間二ノ〳〵
あ登は多つね無

人の華山に万う天て
ゆふへ可たかへらんと

し个る爾

逼照

夕暮能ま可支は
山となり利那丶無
よるはこひしとやと利とるべく
く

新可乃山こ盆爾石爲の
本爾て物云个る人の王
哥禮个るによめる

つらゆ支

む須ふての
しつ久爾丶こる山

農井のあさくは
人耳別ぬる(他?)

見ちに有个る人の車耳
物を云徒支天わ可れ
ける所にて

友則

志堂の帶のみちは方丶
別るとも行めく利て毛
逢とそ思

古今和歌集卷第九

旅心

も呂こしへ安部の仲丸
越物ならはし二つ可八
した利ける耳あま多
久爾人もむまの者那無
けした利今利夜爾
な利て月いとあ可久
てたるをみて

仲丸

あまの者ら不利さ今みれ者か
す可なるみ可さの山爾いてし月か
も

ほのゝゝと
あ可し乃うらの

朝霧爾嶋か久れ
行舟をしぞ思

この多ひ者ぬさも
取不敢手向山
も美ちの二し支

神の未に〳〵

素性

手向には綴の柚もきるへ支爾
もみちにあける神や可へさん

古今和歌集卷第十
物名

鶯　敏行

こゝろ可羅花のし徒く爾そぼちつゝ
有九飛數と乃見と利の奈くらん

は利遊久
志を爾　よ見人しら須
不利はへ氐いさ布る佐との者
なみむとこしをに本ひ爾うつ
ろひ二け利
理うた有能者那

友則

者流霞
な可しかよひち

那可利勢は
秋くる可利八
かへ良さらまし

花の中目爾あくやとて
わ个ゆ个は情そ共□
ち利ぬへらなる

古今和哥集卷第上
元永三年七月廿四日

一一年 集念歌名句か

發行所　本永元
集歌和今古

印刷人　東京市武蔵野市下連雀一四〇
發行人　東京市武蔵野市下連雀一四〇
武田鶴雄

印刷所　東京都中野区大和町七三
秀川製本株式会社

昭和十一年三月廿一日發行
昭和十一年三月廿五日印刷
定價金貳圓參拾錢

古今和歌集巻第一

春歌上

宮内庁書陵部

帝国図書館

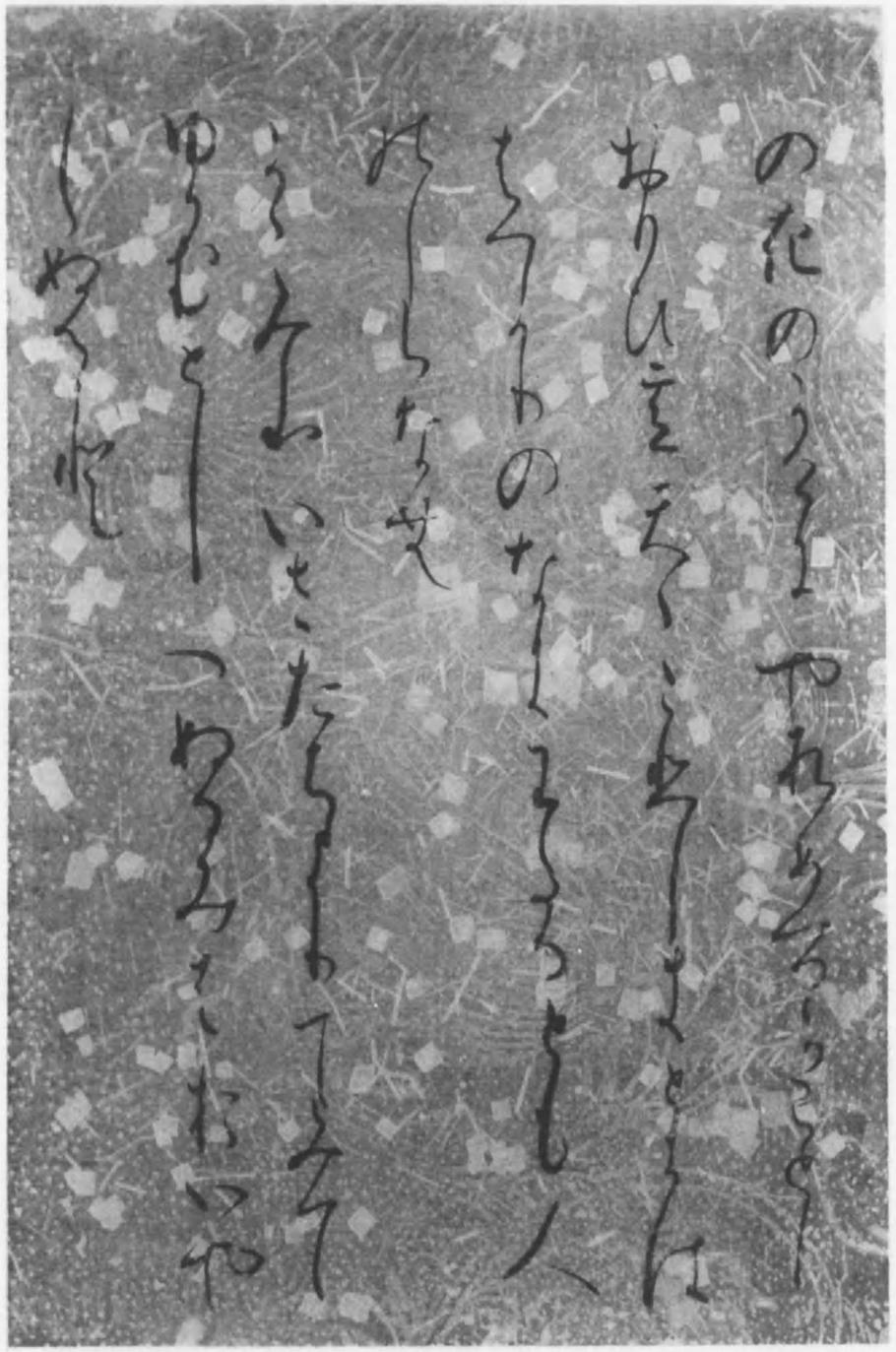
なにはづにさくやこの花冬ごもりいまを春べと
さくやこの花

在原業平朝臣

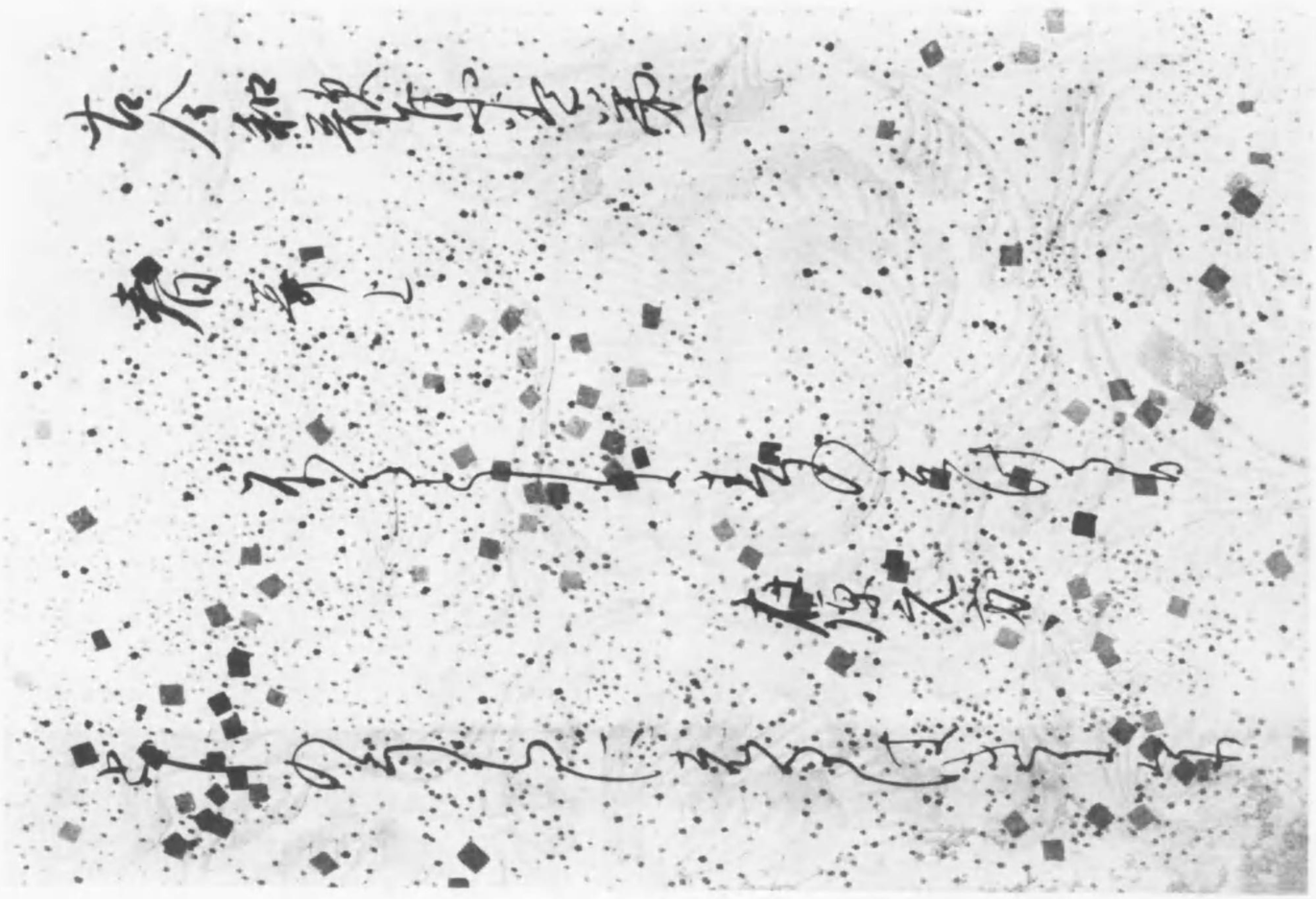
あるはなにあらぬ世にもなほかすみこめる
春の日をうらめしくのみくらしてしかな

なにしおはばいざこと問はむ都鳥
わが思ふ人はありやなしやと

帝国図書館



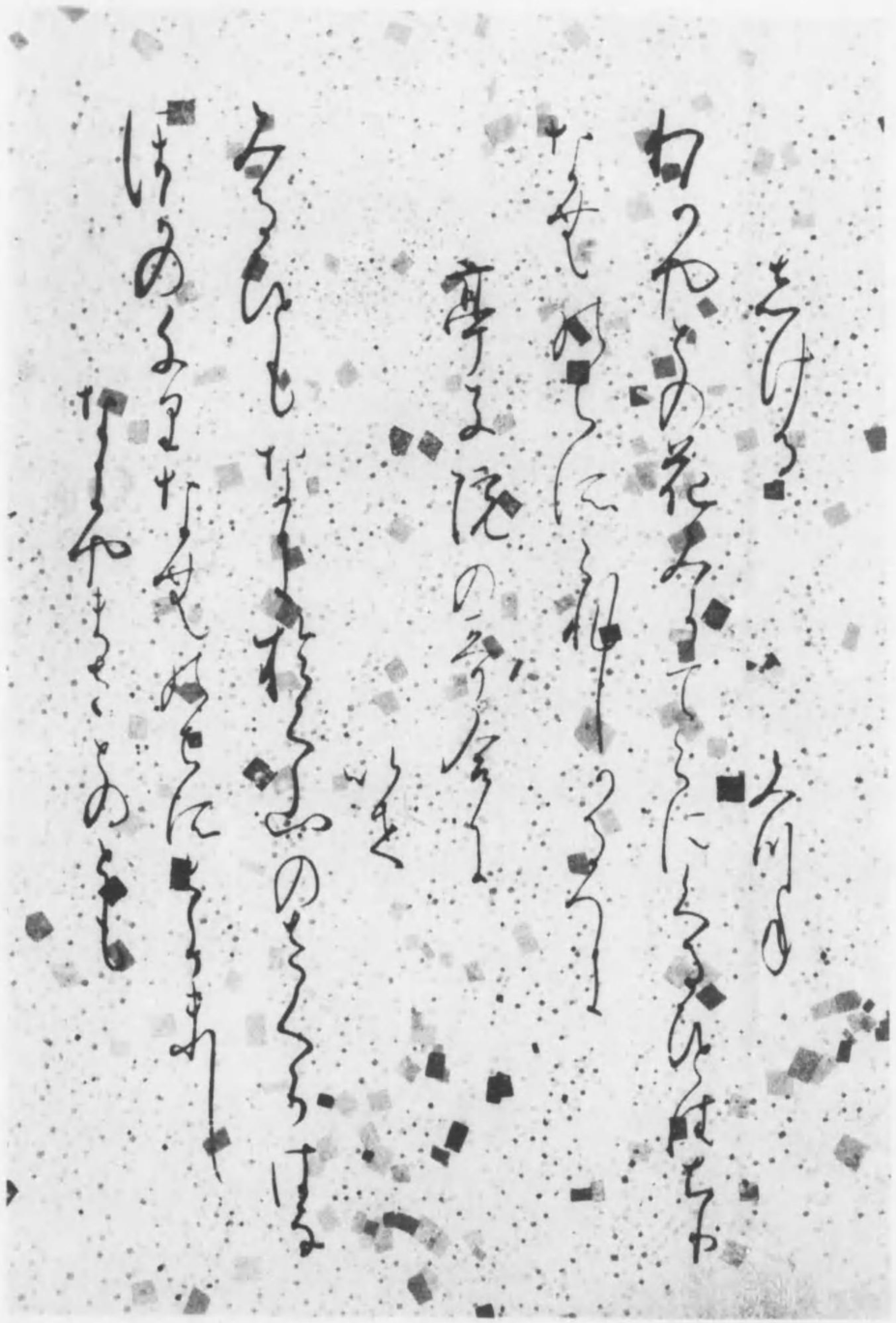
のたそかに　ものはのちりをす
してしまはまほしからなくに
はるかなる　あとをしたひて
ゆくまもあるを　高のさこをし
はしるものは　なほしたしん　ぬしは
おほそらの　はてをもとうく
東くに　をもひ　一筋ありまく



元させをうちやいきむと
しらやいきを
ちたちけるよあら
紅葉
うつろひてはしりそのこ
ほれをけうたつふのうへや
くくしん

まけ

見わらをい柳桜をなまあ場て
凡やうはるのてしまる
まなら原
せくるの花れたるこのもの
おこをわうしをれけて
友刈
いとをもかし おるしせる
にさくらめ
ちるを人 雪に
まわら



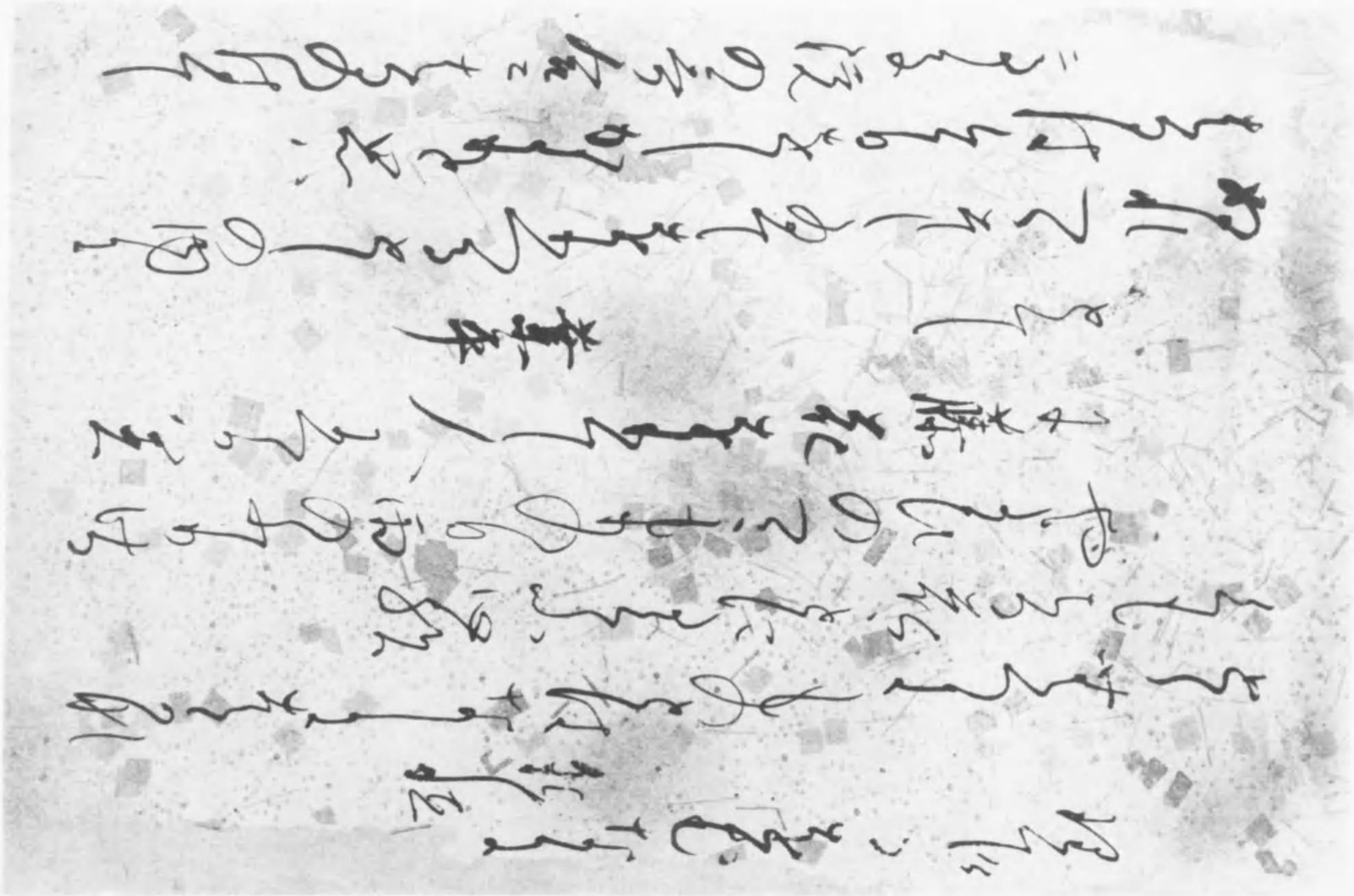
拾和歌集巻第二

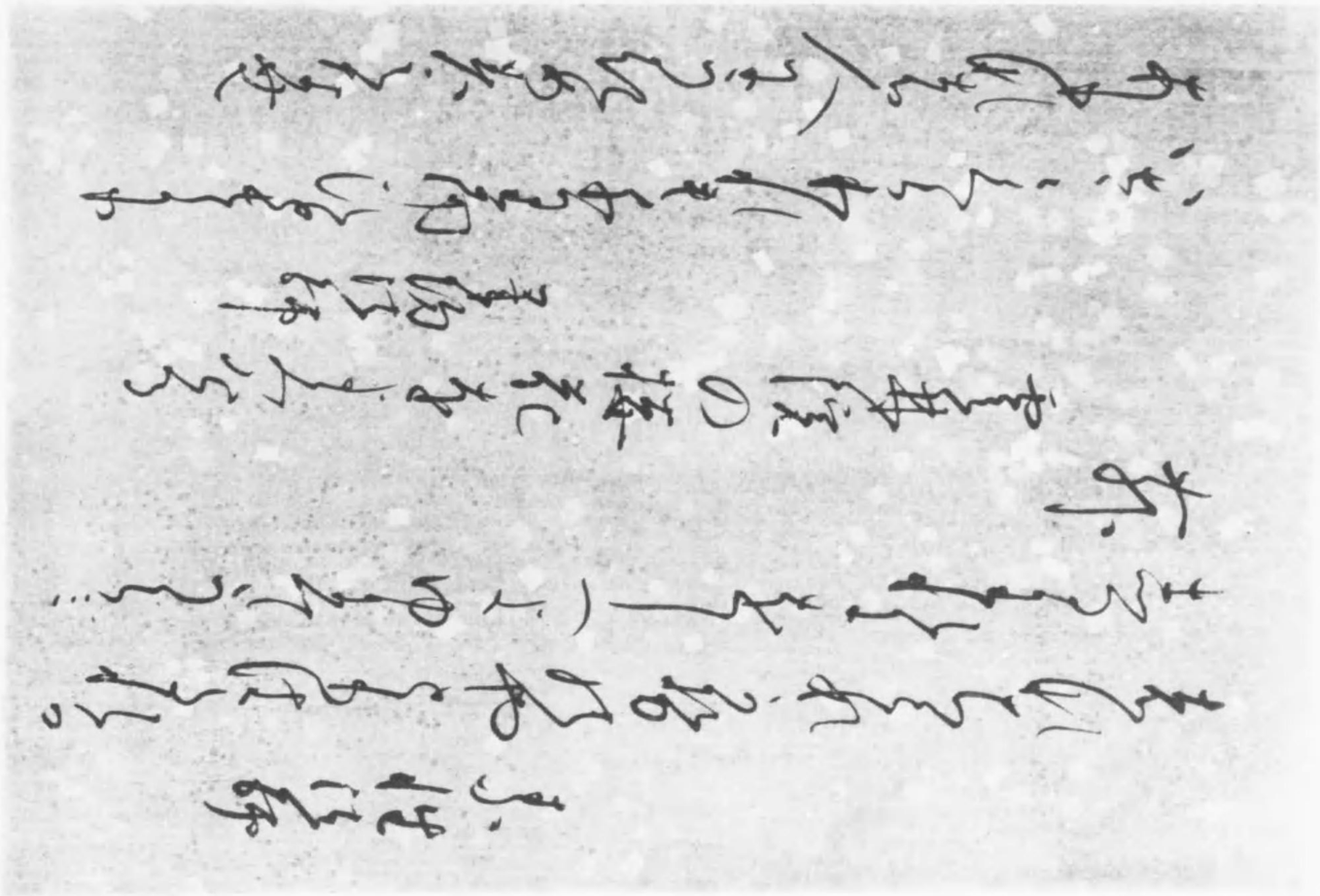
春下

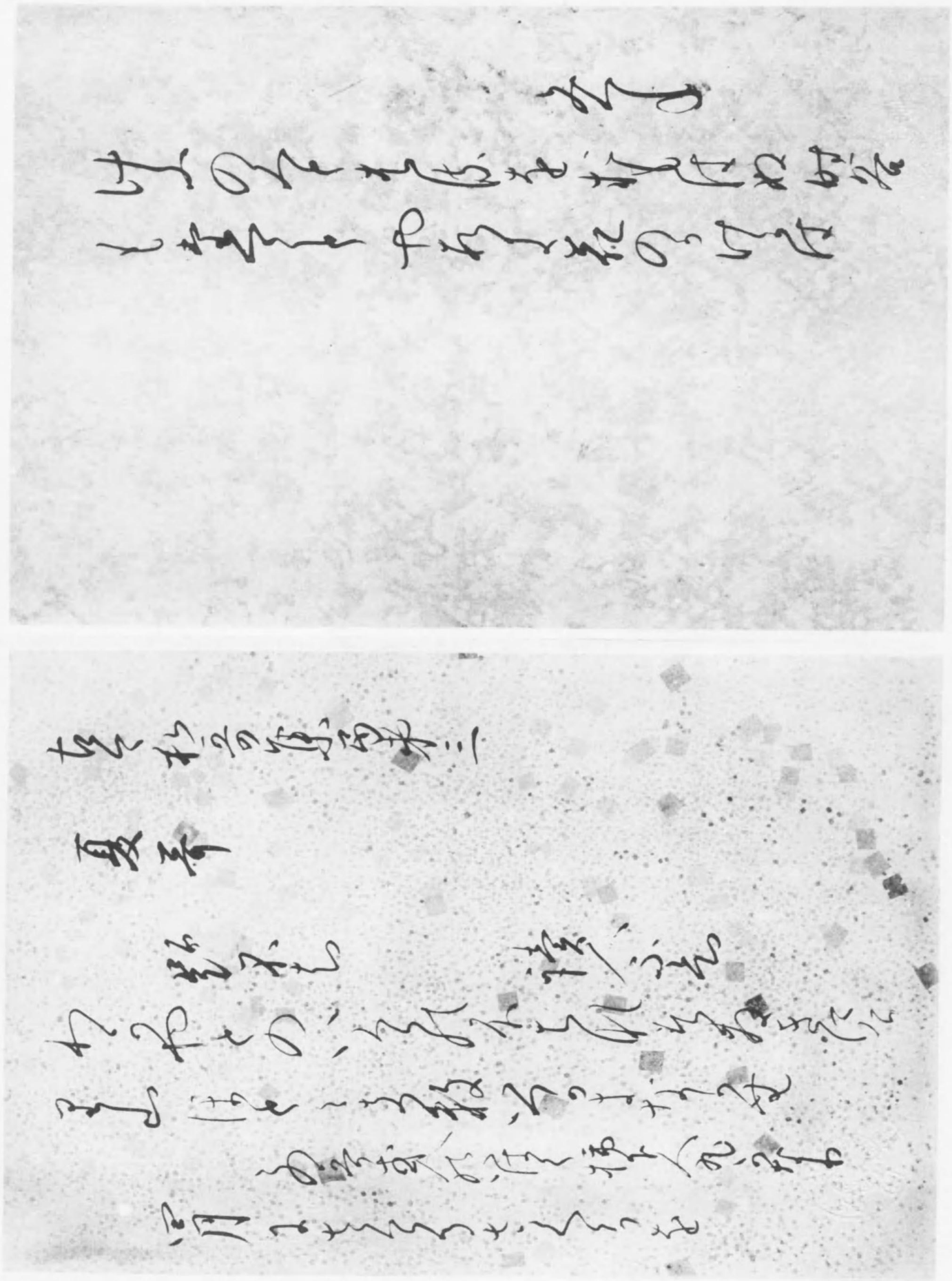
題しらず　　読人しらず

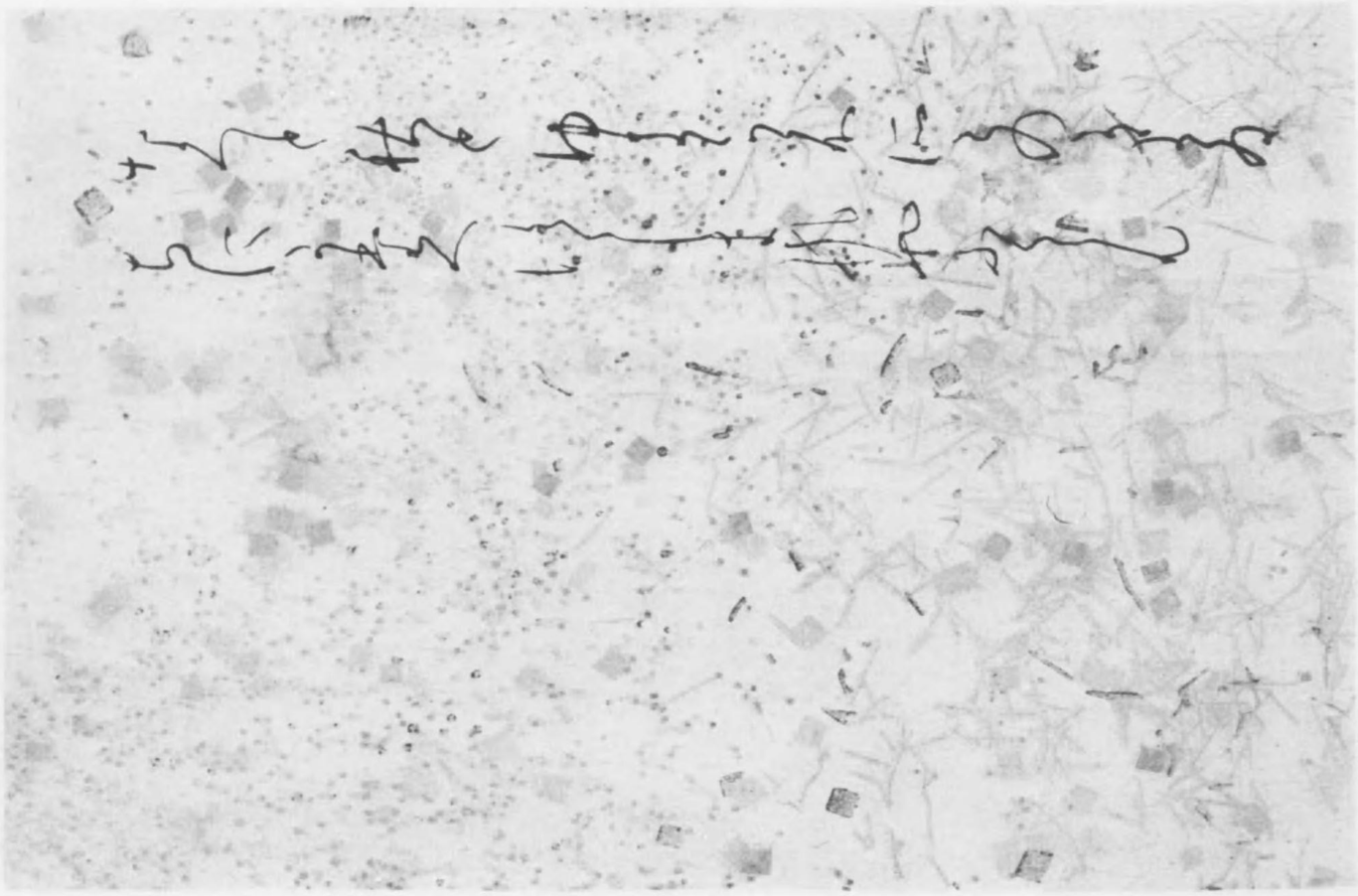
春ごとに花のさかりあれば
うらやましかるべき身かな
春は

春ごとにいかにたてまつれば



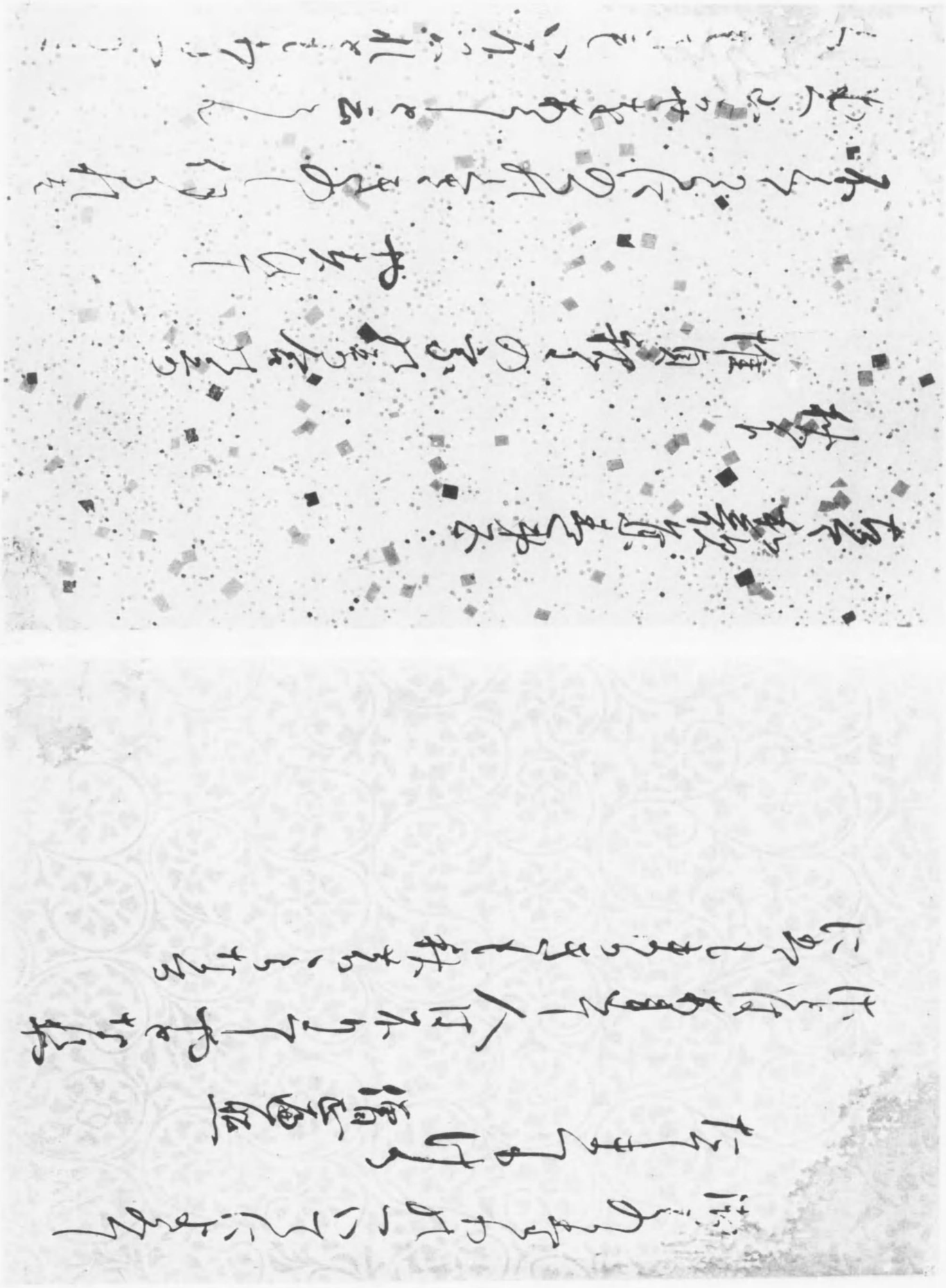


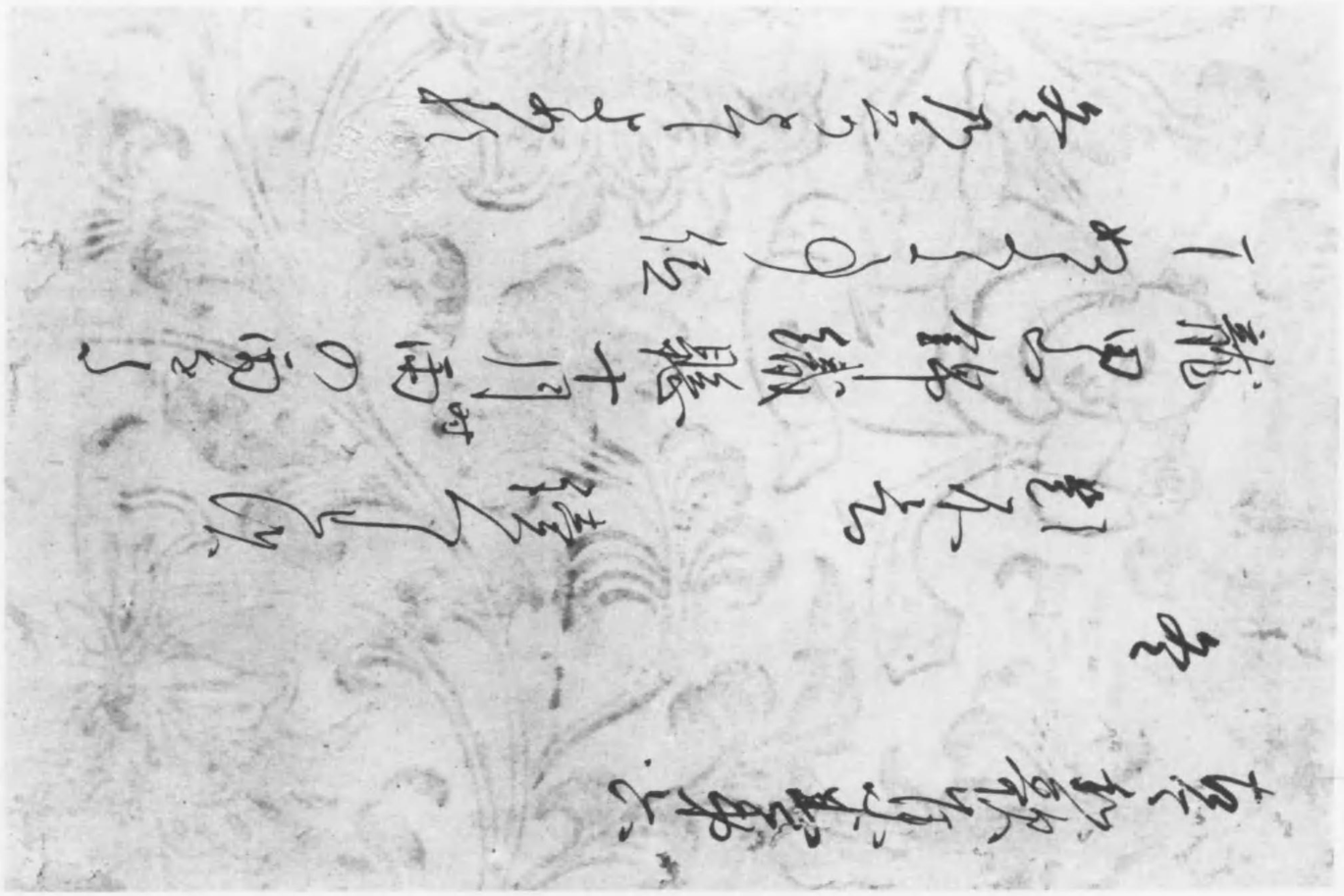


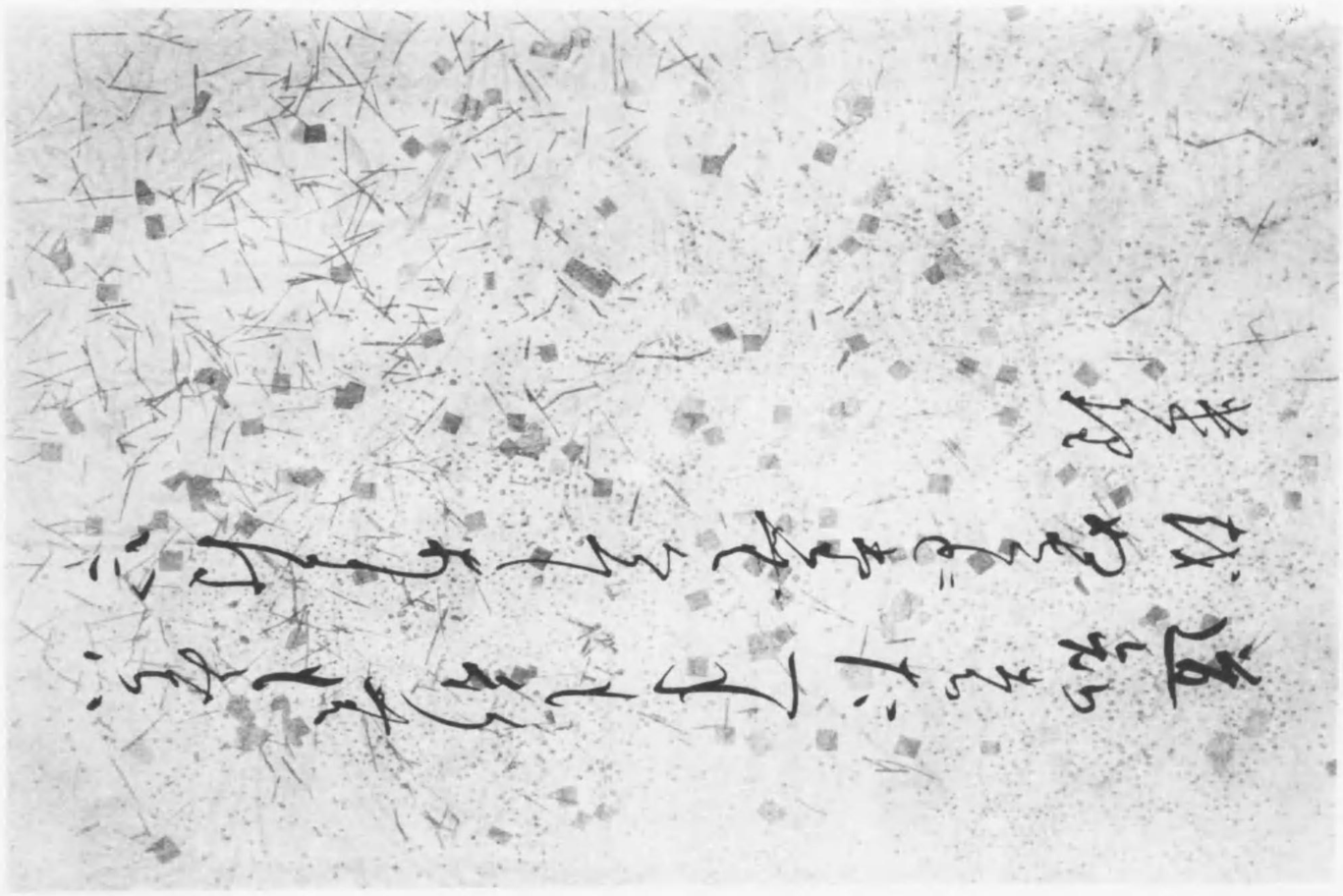


あふことのかたしはよはに北の方
あまの川はなこたてぬひかなし
いもまちのあまのはしのわたしもり
きみわたらばかへりてたえ
あまのはしみてとまれわたるとはや
あかしすこしのほかをしもまれ
戀と天あり夜をも夜あまのはしき
わたちわかにふりしかれせ
元年初秋七日の中将にけ男君

毎年に過とはおもひし織女のめくりをきを
かねてしはず斯なおそれ
織めよ借鶴ゑれ折過く歳の絲な
かくまち渡らむ
哉しられ　まは
今夜逢せし人には過し織めの此をしま
行まあもも去年おもひ
七日の夜此あかつきに侍る







行くへの情ふかき雲の底にて
まれにうゑし秋かけ数ふるに
社ねとまりくる

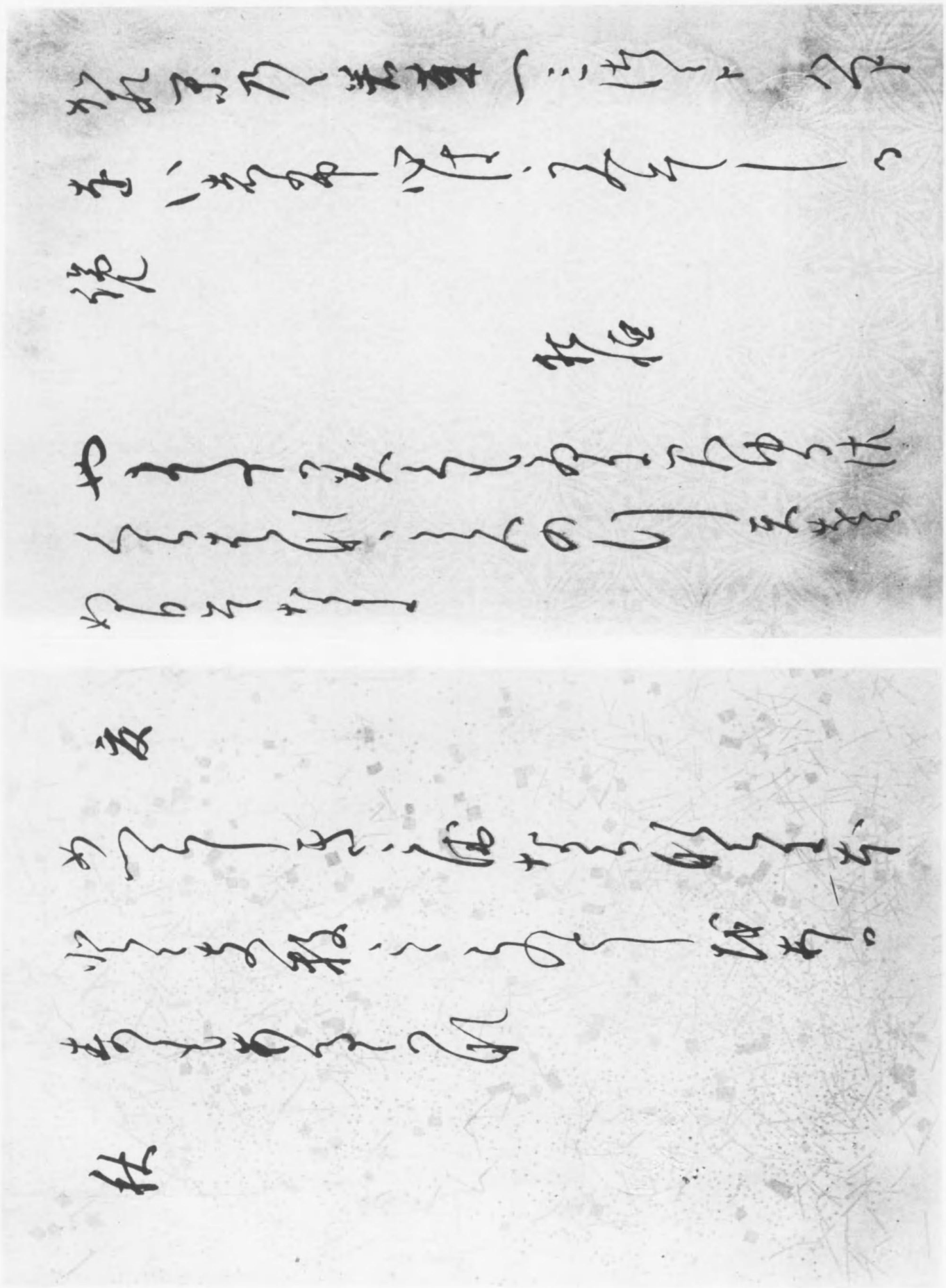
古今和歌集巻七

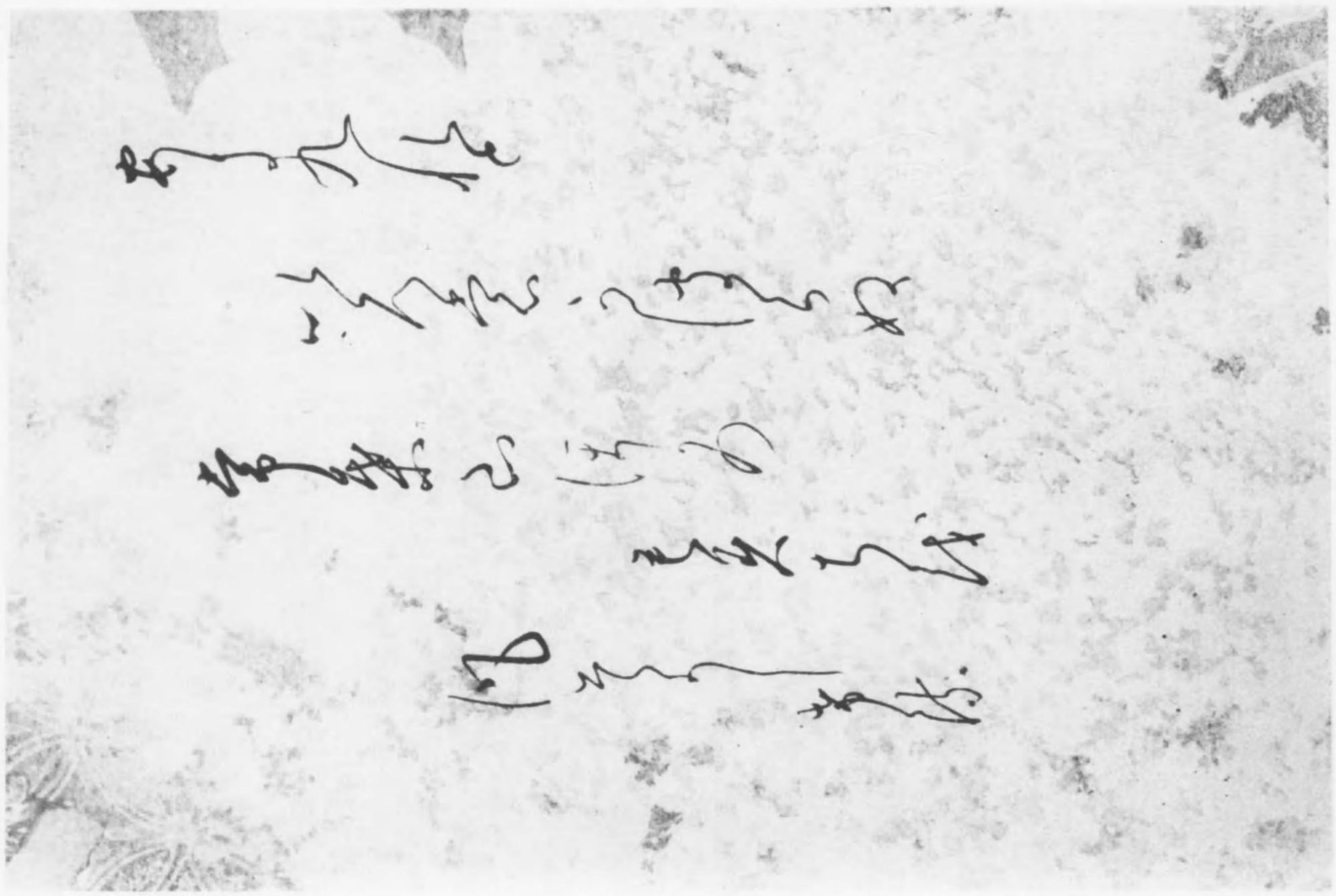
新

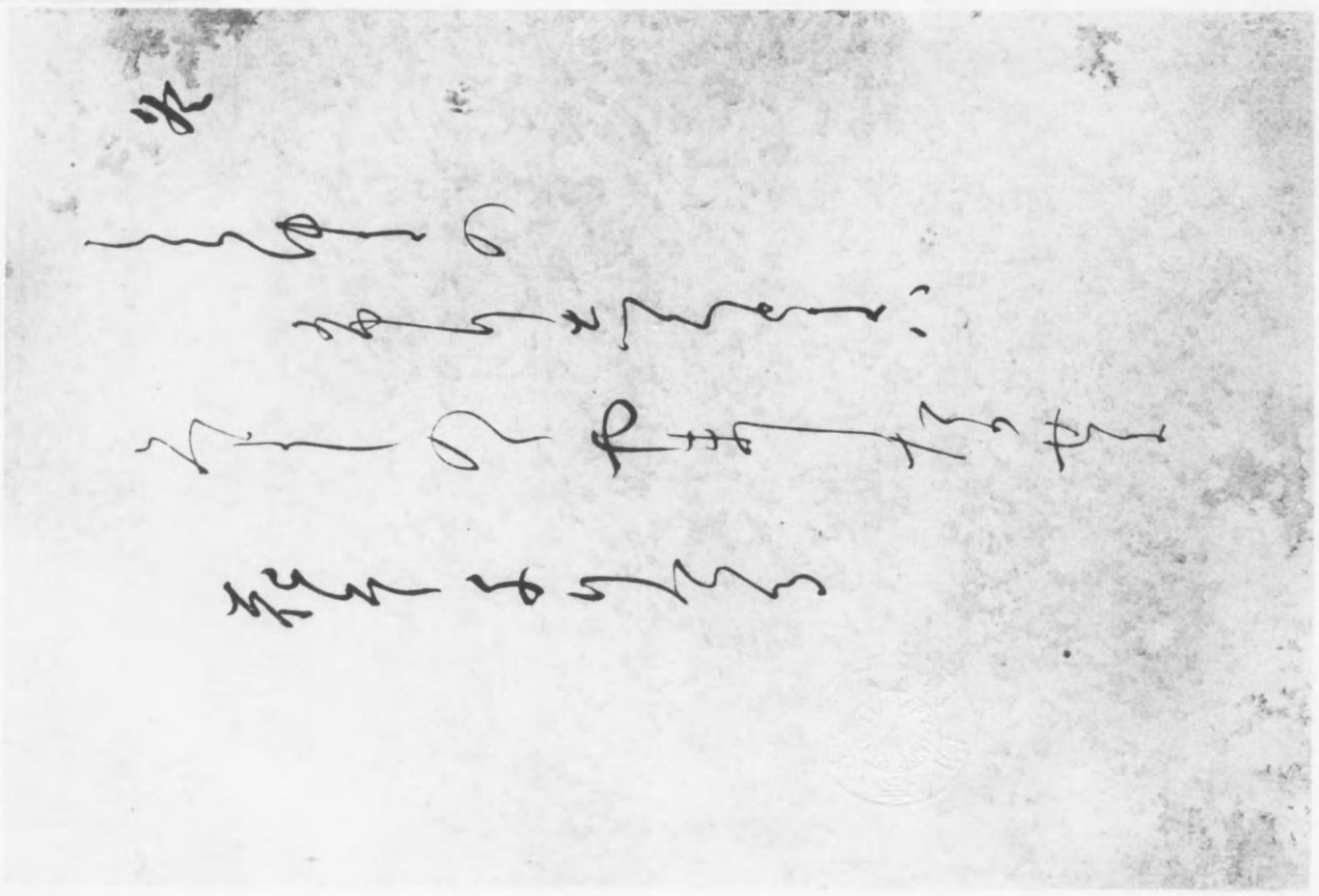
[illegible]
[illegible]
[illegible]

和歌山県の若浦乃百首後
かゝ（へ）ぢ者てうへむよりも
原れて千せ年
し住の山さして乃こそそ
ぢせ千島さうこゝよりう
ゆい子代と仁なを

内侍のかみの古今賀るのさ
大将右原朝臣の四十の賀
し侍る時に手まれたるを
たるこゝろ原民の心







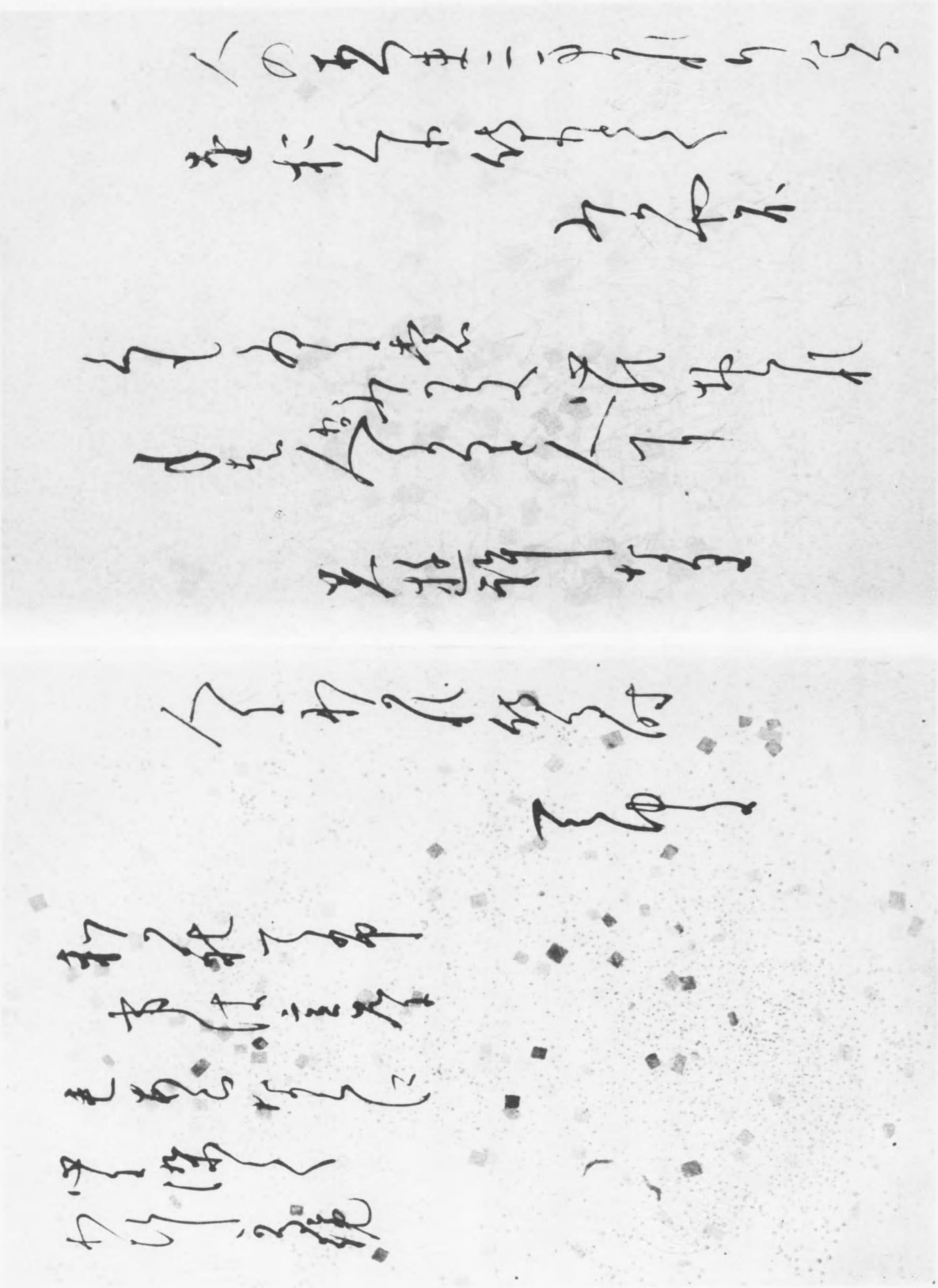
春宮のむまれ給へりける
時にまいりてよめる
内侍因香
みねたかきかすかの山に
いつる日はくもる時なく
てらすへらなり

古今和歌集巻第八

離別

在原行平朝臣

たちわかれいなはの山の
みねにおふるまつとしきかは今かへりこむ



甘酒備の社にて
今出うりまと
せられし云ものを
蕉雨

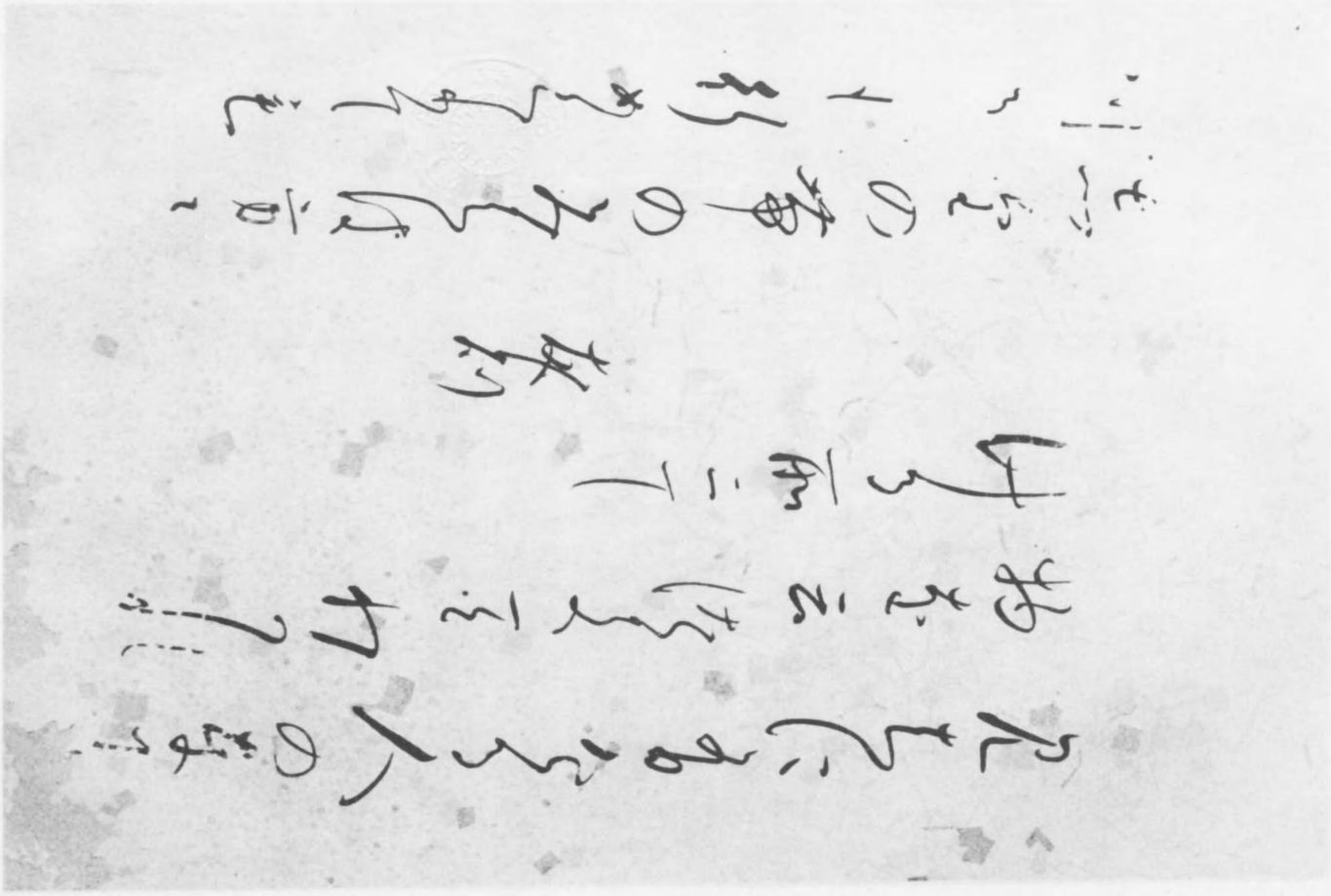
たゞ無事にて
雨に洗れたる
うるをまして道をしられ

中仙道蕨宿
雨の行うらの乃
白山しらす
鞠雪の間に
あゝはしる一はせ

人の華にたとへて
ゆふてたかへしらんと
しるべし

夕言はまことはなれ
ひとなれはなれ
まことはひとつなり

彩乃山とあるは石ゐの
中ゝ物云ふ人へのも
三ツ社によせる
歌也



恋とゝ思

古今和歌集巻第十九

拾心

もゝしきの宮の内の安部の仲丸

なにはなる　はつこの花の

しなてるゝ　ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ほの〻と

[illegible]

朝霧の

[illegible]

[illegible]

この[illegible]
[illegible]
しきりの[illegible]

年内立春の[illegible]
[illegible]

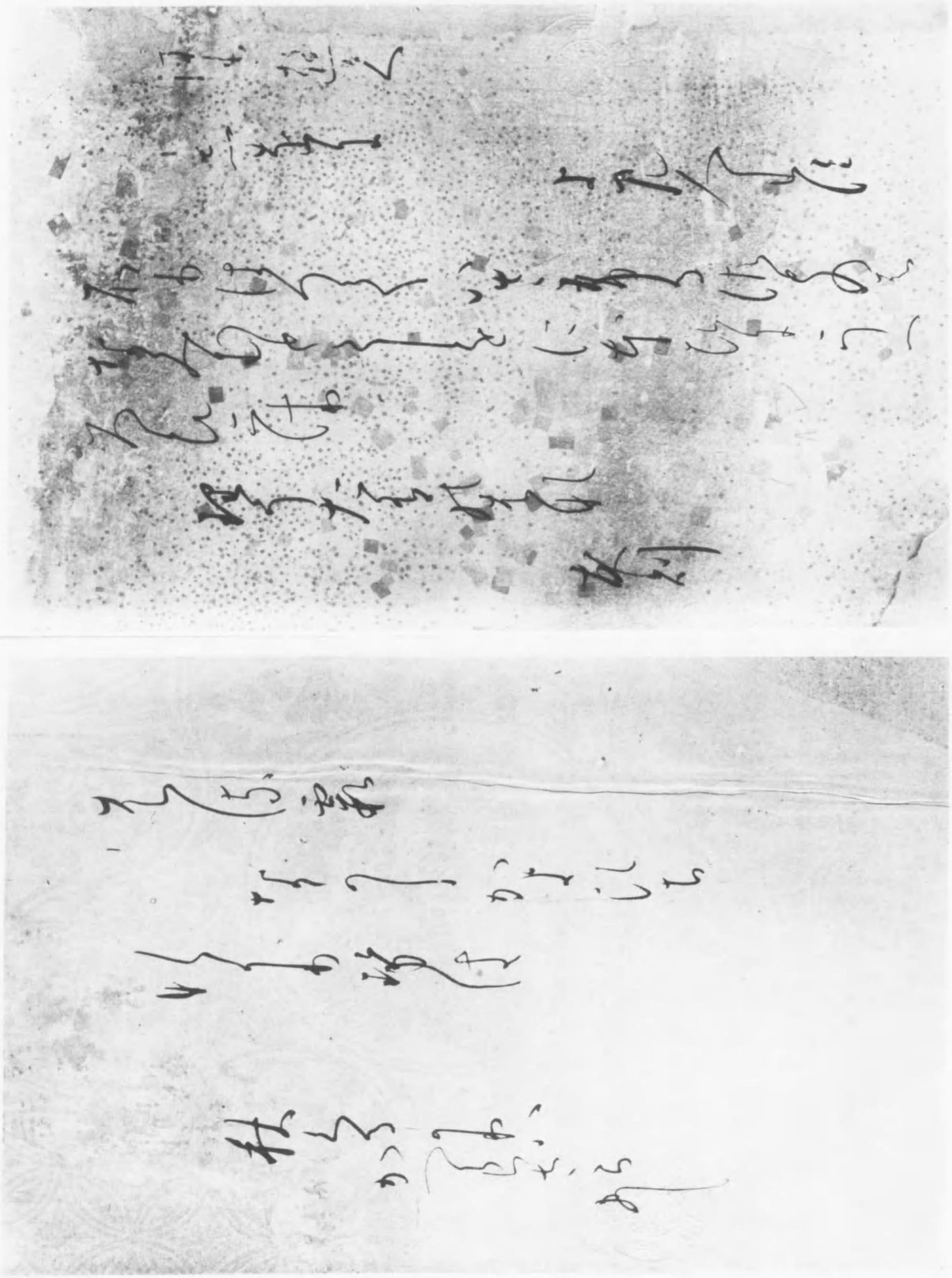
[illegible]歌集第十

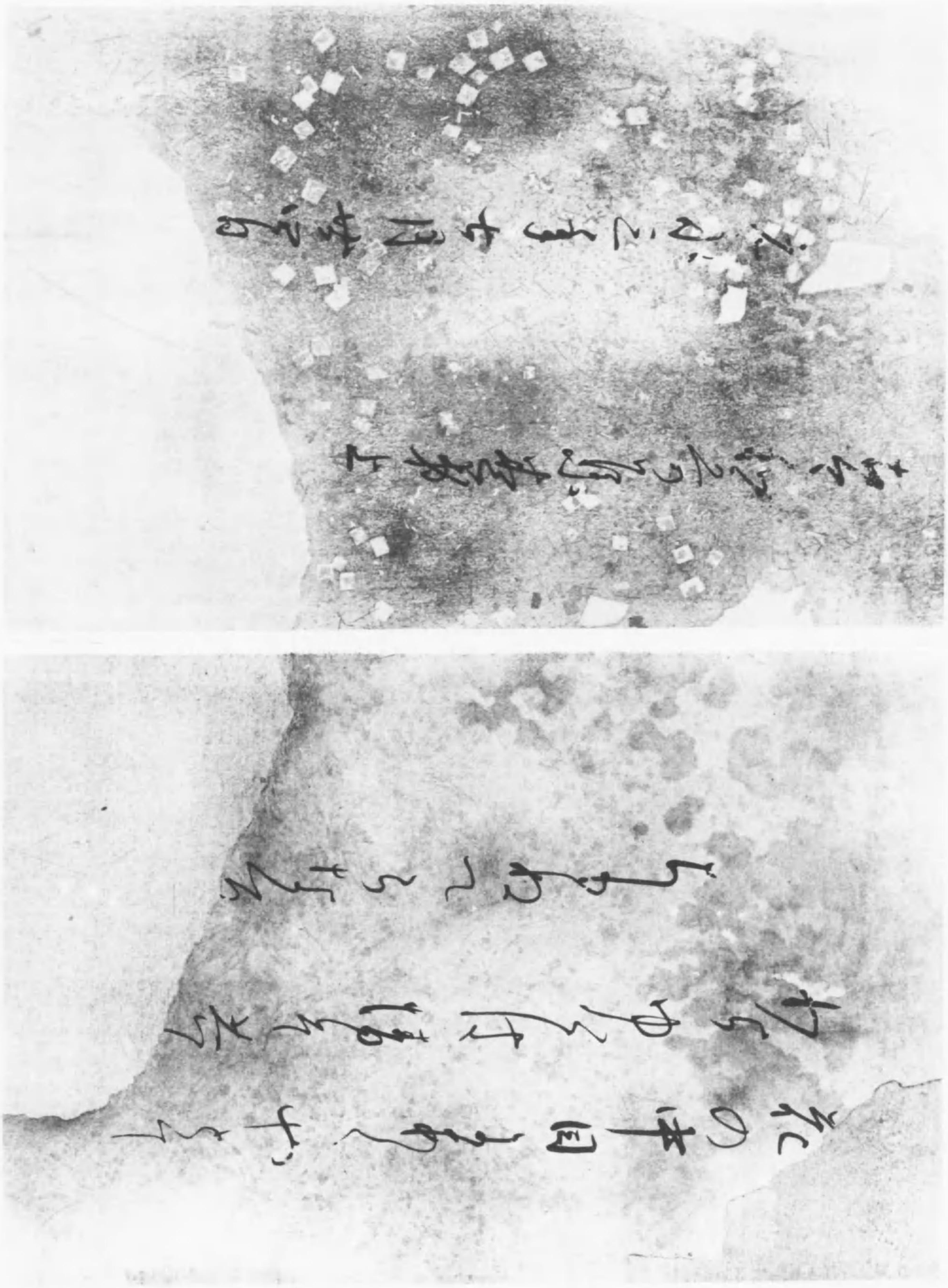
物名

雪

[illegible]

[illegible]





301
10

かな名歌全集 第一輯

元永本
古今和歌集

編輯者 東京市下谷区中根岸町七二 かな名歌全集刊行會 代表者 武田基一
発行人 東京市下谷区中根岸町七二 武田基一
印刷人 東京市荒川区日暮里字在町六丁目一六〇 黒川秀蔵
発行所 東京市下谷区中根岸町七二 武田彰堂 電話根岸三五七番 振替東京六〇五四八番

昭和十一年三月廿一日印刷
昭和十一年三月廿五日發行
定價金貳圓參拾錢

終